

## 山 田 ・ 峰 会 員

1968. 6. 17 チャーターメンバー

権 田 良 彦

山田会員・1924年生、1970年入会、1972年再入会。

峰 会員・1920年生、1973年入会。

御両人は、誠に立派なそして当クラブに最も相応しい会員であった。

山田氏は、小生の末弟と旧制東京高校での同級生であったので、特に親しみを覚えたものであった。

当時、当クラブに川端会（川の端（河岸）には杭（食い）許り）なる旨い物を食べ歩く同好会があり、両君も小生同様熱心な会員であり、又相当な食通で、実に楽しく御一緒に諸所方々を尋ねて廻ったものであった。

ロータリアンとしての山田氏には、海外に於けるクラブ・ライフの経験もあり、ロータリーの在る可き姿を機会を捉えては各方面に説明して居られた。

峰氏亦熱心なロータリアンで、其のS.A.A.での御活躍には、全く敬服させられるものがあつた。

処で、両君の南インドでのインドはしか免疫プロジェクトのボランティア活動は、実に素晴らしい快挙であり、其の御苦勞には文字通り筆舌に尽くし難いものがあつたのである。

此の活動は、御両人に始まり、当クラブを通じて他のクラブへ、そし

てやがて地区、R.I.とワールド・ワイドに広がって行き、時日の経過と共に赫々たる好結果を其の偉大な業績として収め得たのである。

併し乍ら両君の御活躍には大変な御苦勞があったし、御話に依れば、在印中の列車旅行等では全く酷い塵埃に塗れ呼吸すら困難な事もあった由、過酷なボランティア活動が両君の大切な健康を著しく蝕んだ事は事実である。

斯くして率先一身を挺しての行動は、所謂「身を殺して仁を為す」の最も崇高な奉仕活動であり、御両人の御功績は固より、当クラブの大いなる誇りであり、また地区の、日本の、そして世界の偉大な業績なのである。

御両人を喪った事は、御家族は勿論、私共にとっても、極めて悲痛に堪えない処である。併し乍ら御両人の御遺志は、永く関係者一同の、そしてロータリークラブの内に輝き続けるのである。

天国に在る御両人よ、何卒安らかに眠り給え。 合掌。

(平成6年3月9日・記)

## 彝 さん の こ と

1968. 6. 17 入会 チャーターメンバー

今 中 祝 雄

私が幹事を拝命した82～83年度は当クラブ創立十五周年に当り、何か式典か記念行事をやらねばということが、理事会の議題にのぼっていた。

15年といっても大した基金がある訳でもなく、寺中会長も出来る丈、有意義にして簡素にという意向であったので、思いあぐねていたところ、偶々彝さんからポリオの予防ワクチンをインドに寄贈するプロジェクトをやらないかという提案があり、渡りに船とばかり乗ることになった。

とは云っても一同ポリオの恐ろしさ、又ワクチンの保存の難しさ、などを認識していた訳でもなく、第一にインドといえ、ガンジーとかガンジス河ぐらいしか脳裏に浮かばない我々にとって、現地でのワクチン投与作業がどれ程困難なものか想像も出来なかったのである。

おそらく彝さんも、内心では我々の余りの無知さに苦笑しておられたに違いない。それからというもの、或日はワクチンの製造工場を見学して説明を受け、或夜はボンベイから見えたロータリアン共々、自分で撮って来られた写真を手し、ポリオ患者の悲惨な状態を聞かされ、等々連日連夜のようにレクチャーを受けた次第である。

処が今度はクラブ内部からロータリークラブは寄付団体ではない。我々の理念はI. SERVEであってWE. SERVEではない筈だ。第一そんな僅かなものを寄贈したところでポリオの予防に何の役に立つもの

ではない。おそらく末端に行きつく迄にどこかえ消えてしまうのがおちだという反対論が出て来た。

成程、云われて見れば是も正論であり、当時の我々は右に流され、左に流されまったくのところに波間に漂う小船のような状態であった。

しかしながら、寺中会長と彝さんの、たとえ貧者の一燈であっても、一夜の飲食に費やすよりは余程意義のあることではないかという、粘り強い説得が功を奏して、とうとう理事会の承認を得ることが出来た。

それも最低三百万円位はという話しを、どんどん値切って結局百万円で決着をつけた訳である。金額はとも角、如何にボランティア活動とはいえ、十分な精神的バックアップもなく、山田・峰両会員をインドに送り出してしまったことは、今にして思えば、あの水泳で鍛え抜かれた彝さんの強靱な肉体が病魔にむしばまれる一因となったのではないかと、忸怩たる思いで一杯である。

ともあれ類まれな情熱と行動力、それを裏付ける精緻な計画性と企画力、それが貧者の一燈をあの大膽なポリオプラスとして結実させたことは言を待たない俟たないであろう。

私にとって彝さんはまさにスケールを超した巨大なロータリアンであった。けれども反面こよなく酒を、運動を、そして人生を愛された彝さんの、小さな老眼鏡をかけて懇々と話しかけられた温顔は、何時までも私の臉からきえることはないであろう。

## 偲 ぶ 草

1968. 6. 17 チャーターメンバー

阿 部 敬 二

20年ほど前、当クラブに権田先輩を会長に食べ歩きの会「川端会」が発足しました。いまでこそ飽食の時代とかで、TV・雑誌でも「食」をテーマにしたものがめじろ押し、周囲にはグルメ情報があふれていますが、当時はまだその兆しが見え始めた頃といえます。丸谷才一が「食通知ったかぶり」を文藝春秋に連載しはじめたのが昭和47年秋で、全編食事の快樂だけを描いた小説「新しき天体」（開高 健著）が出版されたのも昭和49年頃のことと記憶しています。

「川端会」は2・3ヶ月に一度の割合で、「川端は杭(食い)ばかり」とシャレて、うまいもの屋を探し食べ歩きながら、会員相互の親睦の絆のひとつにしていました。

その世話人が山田彝さんでした。山田さんの博学多才ぶりは周囲の多くが認めるところ、「食」に関してもその例外ではありません。ただし、クラブ随一のグルメ(且つグルーマン)という周囲の定評に応えべく、山田さんは人知れぬ努力を続けられていたように思われるフシがありました。『美味求真』『食道楽』など戦前の名著も読破したり、毎回、通い慣れたる馴染みの店というわけにはいかず、会場に選ぶべく「うまいもの屋」をいつも探し回っておられました。東にうまい店があると聞けば試食に行き、早速ウラを返して馴染み客を装い、西に変わった料理を出すレストランがあると知ると飛んでゆき、料理談義でシェフと常連顔

負けの親密な関係になるといった特技を発揮されていました。

川端会ばかりでなくロータリーのあらゆる場面で、山田さんのなにごとにも熱心に取り組む姿勢、旺盛なサービス精神に接し、そのつど頭のさがる思いでした。

ロータリーの3Hボランティア活動に参加されたのもこの旺盛なサービス精神からだったと思います。RI第320、321地区のプロジェクトに依頼されて最初に南インドに行かれたのが、1982年の1月のこと。約1ヶ月後に帰国され成田でお目にかかった時、「インドでカレーを食べ過ぎたんですか」と冗談に紛らせましたが、素人目にもかなりの黄疸症状がみられました。気候風土の違う国で、過酷なスケジュールのなか飛び回られての疲労困憊ぶりは、お話を伺うまでもなく、まっ黄色なお顔が明白に物語っておりました。

当初麹町RCの創立15周年事業としてスタートし、のちに国際ロータリーの大プロジェクトにと発展していく「南インド・ポリオワクチン投与計画」の推進役の山田さんは、持ち前のサービス精神から、十分な回復を待たず次の活動に突き進んだ結果、病魔に侵されたのではないかと、いまでも思っています。

「南インド・ポリオワクチン投与計画」の実施のため、1984年2月に山田さんとご一緒にインドに行かれた峰さんも、サービス精神の旺盛な方でした。ある晩、二次会・三次会と酒が進んだ席で、しみじみと語られたことがあります。

終戦直前、潜水艦軍医だった峰さんが、何かの行き違いで乗船できなかった自艦が、その晩に撃沈され多くの戦友たちを失ったそうです。

『……本来、俺はあの時死んでいたのだから、60歳になったらボランテ

イア活動に徹し、世の中になにか役立ちたいと思っている……』という内容で、私には忘れられない話として鮮明に覚えています。

死地をさまよう戦争体験をした方々に共通する人生観のようなものが、このお二人の行動にも感じられました。

ロータリーの「奉仕の理想」「奉仕の精神」を言葉として口にすると、私には少々違和感のある響き聞こえるのですが、つねづねお二人が自然体で具現化されていたサービス精神が、それに近いものではないかと理解すると、自分にもできることがあるかも知れないという気になり、勇気が湧いてきます。

## 故・山田彝会員回想

1968. 10. 28 入会

有山房夫会員

山田さんは吾がロータリークラブの親睦委員会の典型的な人物であったと思います。カワバタ会を發起され会員の親睦として、月例的に会員の紹介で、美味しいお店を選び、交誼を深めたものです。

御父君が鹿児島出身の有名な小説家であり、私も同郷であることで良い友人として、共に語り、飲み食べたものです。また朝夕、彼は自転車でよく運動と称して、麴町界限を乗回しておられたことを思い出します。「運動になりますか」と問えば、足の運動になり世俗から離れるから、体に良いとの説明を受けたことがあり、更に所持されていた自転車の「ギア」の優秀なことを自慢しておられました。確かギア切替が数箇所あって、非常に軽くこげるとの事で、楽しみながら運動できるとは、やはり山田さんだなど感心致しておりました。

山田さんはロータリー入会以前、バンコックにて勤務、海外生活経験があり、加うるに外国語も良く話され、とくに外国大使との連繋が多かったようです。南太平洋の某国大使が来日のとき、焼酎工場設置の希望者を探してくれないかと頼まれ、現地には太郎芋が多く生産される旨を説明されたことがありました。

以上、いろいろの思い出がありますが、書くに果しなきものがあります。短き乍ら御冥福をお祈り申し上げます。



## 故・峰英二会員回想

1968. 10. 28 入会

有山房夫会員

峰先生が吾がロータリーに入会され自己紹介のときに「自分は旧海軍の医務官として、戦死せんとしたことが数回ある。それは出港が遅れたことが幸いで、本当に運がよかったからである。」旨を話されたことである。私(有山)も旧海軍に籍をおいていたことを共に話合い、以来九段坂病院に外来として診察するときは峰先生の紹介をしてもらうこととし、又数回、峰先生自身の診察を受けたこともあり、加うるに家族の医療は九段坂病院通いがほとんどで、娘の出産も産婦人科を紹介してもらって、親子三代御世話になっていたとき突然に帰らぬ人となり残念なことです。

先生は、職業奉仕として海外に出張、治療され、その名は世界のロータリークラブに「ポリオ」の義援運動として広がり、麴町ロータリークラブが先生と行動を共にされた故山田会員ともども、わすれ得ぬ人であることを想い、御冥福をお祈り申し上げます。

## 山田 彝 大人を偲ぶ

1969. 3. 10 入会

新 庄 勝 助

光陰矢の如し

ツネさんとお別れしてから、早くも5年の歳月が過ぎた。眼元をほころばせながら夏の夜長にフラッとやってくる、明るく陽気な人なつっこいツネさん。こよなく酒を愛し酒豪で物知り博士、雑学の大家、語学については知る人ぞ知るという方でした。少し鼻にかかった独特な雰囲気醸し出す話し方、何事も究めないと気のすまぬ性格、話はつきず時間を忘れさせられる。

そうだ、こんなことを思い出す。

小生の分野である薬学について、専門外なのに滔々と微に入り細に亘っての解説には脱帽の他ない。多趣味で東南アジアの研究と希観本の蒐集家であった。このような豊富な経験と知識に基づく、R.Cの運営に於ける指導力には誰しも尊敬と満幅の信頼を寄せられていた矢先、会長職早々、遠い遠い永遠の旅路に立たれ、断腸の思いであったであろうと推察する。R.Cでは私は山田会長を補佐する立場で、短時間であったのが悔やまれる。

南インドでポリオプラスに苦しむ子供達の調査に出かけられる折、ドイツメルク社製の「アテブリン錠」を呈したところ大げさに喜んでくれた様子が、つい昨日のような気がする。

さて、経歴が示す如く山田さんは、東京生まれながら鹿児島出身であると大変誇りにしておられた。父君(鹿児島出身)はご承知の**きだみのる**

こと山田吉彦(ファール昆虫記、気違部落その他)の著者、母君浜(仏文学者)である。

旧制東京高校から東京大学法学部を卒業され、日本レミントン・ランド、住友スリーエム、富士ゼロックス・東南アジア地域支配人を経て、マーケティング専門のコンサルティング会社MRDインターナショナルを設立。1982年国際ロータリー3Hに、インドのハシカ免疫プロジェクトのボランティアに選ばれて、二度にわたる長期滞在に挑戦された勇氣ある行動は、崇高としか形容がない。実に奉仕の為に命を捧げた人生、波瀾万丈の一語につきる。

健康については殊更に神経質なほど気を使う方でした。水泳や自転車が得意で、とくに自転車については英国製で貴族趣味、颯爽と走る後姿が思い出深い。当クラブでは懇親の実を上げるための“食べ歩き同好会”があった。それを主催され、珍味を探すのに先ずご自分で試食されてから選定されるので、10kg以上もオーバーになった笑い話がある程、コリ症とお世話やきな方でした。彝さんに頂いたギリシャのブランデーのツボの絵柄が美しく、静かに見守ってくれている。全てが懐かしい。

入院中はかたくなに面会を断り続けられたツネさんの心中を察すると、無理にもお見舞すべきであった。本当に悔いだけが残り残念至極。

大きな身体の山田さん、安らかに永遠の眠りにおつき下さい。心からご冥福をお祈りいたします。のこされた奥様、お二人のご子息のご健康をお祈りし、拙い文を結びます。 合掌

## 山田 彝 君 の こ と

1970. 1. 2 入会

網 野 誠

山田彝君が本麴町ロータリークラブに入会したのは、私より8ヶ月後の昭和45年9月であった。事務局から回覧される新入会員の推薦書を見て、私の弟に確認したところ、山田君は旧制7年制の東京高等学校文科乙類での同級生であり、東大法学部でも一緒であったとのことであった。

弟の話しによれば、山田君は府立四中から東京高等学校の高等科に入ってきたが、父兄会に見えた同君の母君は、戦前の婦人には珍しく瀟洒な洋装姿であったのが、印象に残っているとのことであった。山田君の父君は天下無宿の放浪作家といわれ、終戦後間もない頃のエッセー風の風刺小説「気違い部落周遊旅行」やファールブルの昆虫記の翻訳で有名な、きだみのる(本名 山田吉彦)であり、フランス留学期間が長く、また母君もフランス文学者として有名だったようである。それで山田君も子供の頃から西欧風の家庭の雰囲気の下に育ち、高校の第1外国語は独乙語であったが、むしろ英語やフランス語の方が得意だったようである。因に彼の難しい名前は、父君が尊敬する大正時代の著名な洋画家の中村彝氏にあやかってつけられたとのことであり、辞書によれば音で「イ」と読み、中国の天子がその宗廟に常に具え置く礼器のことであるという。

山田君は学生時代から軍国主義には反抗的であり、愛する女性のためには命は棄てられるが、国のためには命を棄てる気にはならないなどと云っていたそうである。それで昭和19年兵役に服するに際しても、陸海

軍の幹部候補生を志願せず一兵卒として入営し満州で終戦を迎えたが、ソ連での抑留期間中の通訳の生活を通じ、ロシア語も身につけたようである。

このように山田君は家庭の影響もあっただろうが、外国語には特に豊かな才能に恵まれており、大学卒業後も日本レミントン、住友スリーエム、富士ゼロックス等専ら外資系の企業を転々し、富士ゼロックスでは海外事業部長を経て東南アジア支配人として昭和43年までバンコックに在住した。同年帰国後国際マーケティング専門のコンサルティング会社MRDインターナショナルを設立し、昭和45年に国際ビジネスコンサルタントの職業分類で当クラブに入会したものである。山田君はバンコック在住中に現地のロータリークラブのメンバーとしての経験もあってか、入会時からロータリーに関する知識も豊富であり、他のクラブの会員や海外ロータリークラブの会員とも積極的に交際して、奉仕の機会としての親睦に意を用いた。またロータリーの在り方については、彼なりの見識を持っており、折に触れて当麹町ロータリーの運営についても何かと具体的な意見を聞かされたものである。

たまたま昭和53年、私よりクラブ歴も年配も古い会員が、チャーターメンバー2人を含め、6～7人も居ったにも拘らず、頼まれれば敢えて否とは云えない正直者の故に、私は、当クラブでは会長ノミニエでもある副会長を引き受けざるを得ないこととなった。次期副会長には幸い、故千葉源蔵文芸春秋社長にお引受け戴いたが、幹事を誰にお願いするかは色々迷った。会長を引き受けた以上、クラブの発展のため最善を尽くさなければならないのは当然であるが、自らはあまり自身もなく、かつ、物ぐさの故に、結局山田君の積極性とそのロータリーについての知識や、彼の素質能力を発揮して貰うことによりその責を免れることがで

きないかと考えた。山田君は組織の中でラインのコースをたどって行くタイプではないが、委されれば意欲的にその素質能力を發揮するタイプのように想われた。そこで次期の理事その他の役員の構成や理事会の運営などは原則的には一切委せるから、会長になったつもりで幹事を引き受けて欲しい旨要請した。山田君は自分のやりたいようにやらせて呉れるならとのことであったので、山田君自身が推薦した理事から特に強い異見が出ない限り、山田君の幹事としての行動には、一切口を出さないと条件で引き受けて貰うこととした。主として山田君と、山田君が推薦して理事をお引受け頂いた諸氏により運営された1979年～1980年の麴町ロータリークラブは、それぞれの諸氏の創意ある意欲的、積極的な活動によって、本クラブにおいては、山田君が業績報告書の中で「これが始めてです」と報告しているような数多くの業績があった。その中には私の措置が拙劣であったため、会員の皆様が不愉快に思われたであろうような事件もあったが、兎も角活気があったし、一つの転換期であったようにも思われる。評価は当時の会員の皆様にも色々あると思われるが、その功罪の半ば以上は山田君に負うところが多い。

山田君の生涯は、会社組織の中では十分評価してもらえなかったその素質能力と積極的な意欲とを、ロータリーの奉仕の生活の中で、最後には今回のポリオ免疫プロジェクトの推進を通じ、燃焼しつくすことによって、その情熱をロータリーに捧げたものといえよう。

御冥福をお祈りする次第である。

## 山田彝さんと峰英二さんの思い出

1970. 10. 15 入会

新 村 重 晴

もう23年も前のことですが、山田彝さんは私より僅か1ヶ月位前に当クラブに入会されたばかりでしたし、年頃も同じ位だったので、新入会員同志という気安さで私達は例会ではよく話をしていました。

そのころ、私にもイニシェーションスピーチの順番が廻って来ましたが、どんなことを話して良いのか戸惑っていたところ、山田ツネさんがイニシェーションスピーチの時だけは自分の経歴の他に、仕事の宣伝を大いにして良いのだ、と教えてくれました。ツネさんは外国駐在中にロータリークラブに入っていたとかで、新入会員であるにもかかわらずロータリーの事をよく知っているなど思ったのが知り始めた頃のツネさんの印象でした。

峰英二さんは、成城高校出身で私よりは3年先輩でした。峰さんが成城高校を卒業された年に私が入学したことと、運動部も違ったために、峰さんが私より2年余りおくれて入会されるまでは面識がありませんでした。

しかし、同じ高校を卒業したということでお互いに親しくなったのですが、入会された年のクリスマスパーティーでしたかギターを弾き語りして大活躍をされた峰さんにはビックリしました。その後で峰さんの同級生に聞いてみましたら、在学中からハワイアンでは活躍されてかなり有名だったそうです。

また、スポーツは万能選手でサッカー、ウォーターポロ、アイスホッケー等々何でもこなし、インターハイには各部から頼まれて出場していたとのことでした。実に人柄が良く、医者としてもお世話になったメンバーが多かったようでした。今、考えれば峰さんは何事によらず真面目に取り組む方だったのだと思います。

一時期、ロータリーに少し間をおいていた私には、このお二人がどんな経緯でポリオ・プラス・プロジェクトに、あのように深くかかわるようになったのかは判りませんが、よくもあんなに奉仕できるものだと思っていました。私にはとてもできないと感心しつつも、お二人ほどロータリーに熱心でなかった私の遠慮からか、その動機をお二人に聞いてみたいと思いながら、とうとう聞きそびれてしまったのが残念でなりません。

ポリオプラス・プロジェクトを提唱して世界のロータリークラブを動かし、東京麹町ロータリークラブの名声を高められたお二人でしたのに、この世を去られるのが余りにも早やすぎたという感を深くしております。

お二人がロータリークラブに残された偉大な貢献に心から敬意を表し、ご冥福を祈り、思い出と致します。



## 奉仕に散った先達を偲んで

1970. 10. 15 入会

久木野 利 光

1. 山田彝さんは麴町ロータリークラブの二十代目の会長をつとめられました。会長就任の所信のなかで、「① 人間が自分に贈ることができる最大のプレゼントは健康であると言われていました。② 人間の最も貴重な財産は自分が自由に使える時間と言われていました。」と述べられました。
2. 彝さんは外国製の高価な自転車で体力の増進に留意されていた。特定の企業にしばられないで世界の企業を相手にコンサルタント業務を職業とされて、自由に使える時間を持っておられた。会長所信をそのまま現実の生活の中で体現されていた。
3. その彝さんが会長の任期途中の11月中旬に突然入院され、そのまま会長任期終了後間もなく永眠された。死に至る病の原因は明らかにされていない。彝さんの入院後は新庄勝助副会長に御指導をいただいた。彝さんと峰英二さんは1982年、国際ロータリーの3Hインドはしか免疫プロジェクトのボランティアに選ばれて、インドで約1カ月2回に亘る奉仕をされた。  
その後、彝さんと峰さんは相前後して永眠された。インドにおける奉仕の中で未知の病原菌におかされたのではないかと思えてならない。
4. 私は会長彝さんの下で幹事をつとめさせていただいた。

ある日、ぶらりと言う感じで私の事務所を訪問され「会長をやれと言われている。幹事を引き受けて助けてよ」と言われた。郷土鹿児島先輩でもあり、微力ながら幹事を引き受けることになった。

5. 当時麹町ロータリークラブは創立二十周年に当たり、記念行事として大規模なプロジェクトを組んでいたが、幹事在任中彝さんから細かい指示を一回も受けたことがない。大きな体で悠揚としていて、彝さんが居るだけでその周囲が明るくなる得がたい人柄で楽しかった。

彝さんが元気であったら麹町ロータリークラブ出身の2580地区ガバナーとして腕をふるったに違いない。残念でならない。

6. 彝さんは酒が好きで酒席が良く似合う人だった。飲み始めると何時になっても帰ろうと言わなかった。酒席で父君きだ・みのる(本名 山田吉彦 作家・社会学者、著書・東京気違い部落、にっぽん部落など)の話しを時々聞いた。

彝さんの話しぶりで父君を尊敬されている様子がうかがわれて羨ましい程であった。父君がパリ大学卒業、血筋を引いたのか彝さんの語学能力は抜群であった。

7. 峰さんは泌尿器科の専門の医師で、コーラスの好きな親切な人柄で皆に親しまれた。

ロータリーの奉仕活動の中では、特に青少年の育成に力を尽された。千代田ローターアクトの奉仕活動に特に熱心であった。峰さんが健在であったら麹町ロータリークラブが千代田ローターアクトのスポンサーを辞退することはなかったであろうと思われる。

8. 東京麹町ロータリークラブは、創立二十四周年の中分会長のもとで「山田・峰社会奉仕賞」を創設した。

国際ロータリーは1986年7月から5年間に亘り、地球上からポリオなどを撲滅することを目標に、1億2,000万ドル（約200億円）の募金キャンペーンを実施し、その目標を達成した。我が国での募金総額は48億円に達した。

この国際ロータリーのキャンペーンは、東京麹町ロータリークラブが2580地区と2750地区の各ロータリークラブにポリオの撲滅運動を提唱し、これが国際ロータリークラブの運動として発展したものである。

東京麹町ロータリークラブの会員であった彝さん、峰さんのお二人は、早くからポリオの惨状に深い関心をよせられ、南インドでポリオに苦しむ子供たちの調査を2回に亘り実施され、その状況をつぶさに報告された。この調査報告が東京麹町ロータリークラブのポリオ撲滅運動提唱の原動力となったものである。

東京麹町ロータリークラブは、故山田・峰両会員の国際ロータリークラブポリオ・プラス活動における優れた功績を顕彰し、社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげられた個人、グループ、団体及び会員を表彰し、これによって社会奉仕活動の充実発展に寄与しようとするもので、奉仕に倒れた先達を悼む会員の心を表すものである。

## ツネさんを偲ぶ

1971. 5. 12 入会

中 分 亨

ツネさんとの出会いは、私が1971年5月に麴町ロータリークラブに入会した時である。最初に配属された委員会は国際奉仕と、ローターアクトの両委員会であった。ロータリーの先輩から入会した年はクラブにはやく馴染む為に、出来るだけホームクラブへ出席するように教育されていたので、私はホームクラブの出席率80%を心掛けていた。国際奉仕委員会の役務に海外からのビジターの紹介がある。委員長は沢田さん、委員にはツネさんと近浪君と私である。当時は海外からのビジターのない日は珍しい位であった。ツネさんもどう云うわけか出席率は悪い。委員長はやって下さらない。当然慣れない私が壇上に立つ事になる。何とかこなしていたが、正直精神衛生は良くなかった。ビジターが1人、2人の時はまだ良かったが、或る時、日本での国際学会の流れで10数名のそれぞれ国籍の違うビジターがメーキャップにやって来た。相変わらず頼りのツネさんも委員も誰もいない。私は事前のチェックもままならず、10数枚のカードを手にして、壇上に上った。

スペルの読めないカードを適当に読んで紹介したところ、自分の国籍が違っていたので訂正してくれと申し入れられたり、随分対応にとまどった事があった。20数年前の入会一年生の経験であった。

欠席がちのツネさんは何か仕事の関係で、この年度の終り1972年6月にクラブに退会の申出をされ、正式に退会、1ヶ月後に再入会されたの

である。仕事の内容の変化について、じっくりきく機会もなかったが、以前より時間が取れる様になったとの事、私はツネさんがクラブへ欠席がちのお陰で一年間海外のビジターの紹介で、私一人恥をかいて苦勞した話しをした。そんな話しの切っ掛けから、ツネさんに英会話の個人レッスンを受ける事になった。毎週月曜日例会前にツネさんの麴町の自宅を尋ね、レッスン後、例会へ出席する様になった。故吉川さんも生徒の一人だった様だ。

はずかしながらものにならず現在に至っている。

ツネさんは7ヶ国語が話せる国際人で、ロータリー情報にも精通し、更に行動家であった。

1975年12月を第1回として発足した川端会(食べ歩きの会)も権田先輩と共に、10数回続いたが、うん蓄をかたむけて店選びをやり、更に事前に試食をしたりして、参加会員の為に良く面倒をみていただいた。

1978年には私が分区幹事の時、IGF(IM)のことで、東京クラブに故松本兼次郎先輩、網島女史を尋ねた折に、網島女史から、海外から児童画交換の申出がきているが、麴町には小学校も多いので麴町クラブで受けてみてはどうか……

早速クラブで諮ったところ、やってみることに話しがまとまり、其の後国際児童画交換プログラムとして数年間継続されたのである。

このプログラムにもツネさんの活躍が大きかった。永田町、番町、雙葉、白百合各小学校と米国のニューヨークの数校と、英国ヨーク州の小学校の絵画と交換して、それぞれの国で展示会が開催されたのであるが、海外への配送についてはツネさんのJCの友人・東京クラブの松岡信雄さん(当時航空会社の支配人)の手をわずらわし、タダで運んでいただい

た様で、私はこの事実を最近知った次第である。

行動家のツネさんと云えば何といってもポリオ撲滅運動である。

ツネさんの献身的な奉仕活動は、1980年4月にR I 東南アジア難民キャンプの奉仕活動志願者に峰ドクターと共に登録された。ツネさんが第12年度のクラブ幹事の時に始まった。1982年1月ツネさん3 H活動参加の為インドへ、2月15日にはクラブで帰国報告をされ、R I から3 H ボランティア活動に対する感謝状が届いた。

1983年クラブ創立15周年の記念事業として、ツネさんの示唆に基づき、南印度のマドラス地方の住民子弟を対象にするポリオ免疫プロジェクトを実施することになった。坪田副会長を実行委員長として、実行委員会を作り、実行案として、日本のポリオワクチン研究所において精製されたポリオワクチン約5千人分を購入して、山田ツネ・峰両会員にボランティアとして、現地においてマドラスロータリークラブの方々と協力して、ワクチンを供与服用させることになった。

この計画実施に要する経費は、ポリオワクチン購入費とボランティア派遣の為の交通費合併せて約100万円とし、R I 本部からの特別助成金も申請することになった。この計画の推進を伝え聞いた当258地区、隣の275地区からも経費の援助の申出があり、258地区の東村山、東京、浅草、秋川、足立他のクラブで66万円、地区から50万円の寄付を受け、275地区からは364万円の寄付が集まったのである。

1984年2月に再度ツネさん、峰ドクターは約1ヶ月、インドへ出向され、3月5日にクラブで帰国報告がなされた。8月には地区ガバナー賞が両会員に贈られ、10月にはスケルトンR I 会長賞を授賞された。其の間ツネさんは地区のW C S 委員長として、東奔西走の活躍ぶりであった。

こうしたツネさん、峰ドクターの献身的な奉仕活動は、国際ロータリーの世界社会奉仕部門の数多いプロジェクトの中で、ポリオ免疫プロジェクトが最優先順位に指定されたのである。R Iは1986年7月から向こう5ヶ年間の継続事業として募金活動をする異例の決定がなされたのである。その内容は5年間に亘り地球上からポリオ、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風などの撲滅を願い1億2千万ドル(約200億円、日本担当分40億円)を目標として募金キャンペーンを実施することになり、1991年6月募金総額2億1732万ドルに達し、当初の目標をはるかに超えて、このキャンペーンを終了した。日本での募金総額は48億9856万8628円に達したのである。

ツネさん、峰ドクターは志半ばにして、1988年クラブ創立20周年の記念すべき年にツネさんは会長職のまま、峰ドクター共々他界されたのである。きくところによるとインドの風土病によるものとの事、誠に痛ましく、壮絶な戦死の様な気がしてなりません。

1992年私が会長の年度に、久木野副会長のご提案を受けて、中央分区の会長幹事のご賛同をいただき、献身的な奉仕活動に専念し、逝去された山田・峰会員の遺徳を偲び、その功績を顕彰し、広く社会奉仕の分野において優れた活動を行い、顕著な業績をあげた会員、民間の個人、グループを表彰しこれによって社会奉仕活動の充実発展に寄与することを目的として、山田・峰社会奉仕賞を設けさせて頂きました。

1988年7月、ツネさんのお別れ会からはや6年が経過いたしました。クラブとしても惜しい人材を失いました。

思い出の一端をつづりご冥福をお祈りいたします。

合掌

## 故 山田・峰両会員に捧げる

1972. 3. 6 入会

山 下 寛一郎

山田会員には、青年会議所の先輩として「お前はクラブ・ライフを楽しんでいない。」と忠告していただきました。二十才代の私には、右を見ても左を見ても、年長の方ばかりでなかなか馴染めなかった頃です。

有り難い言葉に励まされて、例会毎に、まず一人の方とお話をさせていただこうと努力しました。「クラブ・ライフ」を楽しめる様になったのは、幹事をさせていただいた時までかかりましたが。

峰会員には、六本木ヘダーツをしに連れてもらったおり、外人の方々と共に、エンジョイされ、何時になっても帰ろうとされない姿が残っております。又、私が血尿をだした時、遊層腎と診断していただき、適切なアドバイスをいただきました。

お二人より友情と健康を教えてくださいましたが、命を懸けてなされたあの「奉仕」については、まだまだ、これから勉強させていただきます。

安らかにお眠り下さい。二人の大先輩。



## 彝先生との出会い

1972. 4.17 入会

齋藤純生

部活(社会科学研究会・柔道部)に熱中の余り大学受験準備を怠り、一浪を覚悟、苦手だった英語の補修を目指し、予備校替わりに千駄ヶ谷の津田スクール・オブ・ビジネスの予科を選択、高卒後1年籍を置くことに成りました。

当時の日本の国情は、戦後の荒廃からの復興途上にあり、Pax Americanaに表徴されるアメリカの強大な経済力が世界を支配しておりました。本来、ジャーナリズム志向の私にとって、海外特派員を目指すかぎり英語が何は扱置き必須の素養であることを念頭に、この専修校での1年が経過しました。

当時、芝公園にあったアメリカ文化センターの図書館へ授業後日参、ジャーナリズム関係書の読書に専心しました。津田での1年の浪人生活は、殊の外快適で、その授業内容も、通常の四年制大学に比べ遥かに充実しておりました。そこで、四年制大学受験への志は捨て、予科2年に進み、最終コースの本科に至る3年を津田で過ごし、四年制大学の卒業生と社会人の世界で競う決意をしました。

津田の本科課程では、英文速記、英文タイプの授業があり、英文タイプ講師として山田彝氏の名前が教員リスト中にありました。今にして思えば、これがやがて麹町ロータリークラブで再会する彝さんとの、今から39年前の最初の出会いでありました。

当時の彝さんはレミントンランド社(米国有数の英文タイプライター・メーカー)の日本支社顧問として活躍するかたわら、津田でタイピングの非常勤講師を務めておられました。授業に登場する山田講師は100名程の学生(女生徒が約70%)を相手に、常に派手なアメリカン・ファッションのジャケットをダンディに着こなし、活気に満ちた授業を消化しておられました。勿論女子学生に対する配慮は格別で、そのスムーズでソフトな対応は、一部の男子学生に不快の念を感じさせるほど、優しく好意的であったように記憶しております。

授業中、時折教壇を下り、教室内を巡回する折、小生の席で歩みを止め、「おい齋藤、卒業後はレミントンランドに就職しろよ」と小声でのメッセージを数回受けた記憶が有ります。にも拘らず、彝さんの好意に応え得ず、卒業後英国系出版社の日本支社に入社、半年を過ぎて渡英しましたので、その後の彝さんとの師弟関係は途絶えました。やがてレミントンランドから米国ゼロックス社に転勤、バンコックに設置されたアジア担当事務所長に就任されたと後年伺いました。

小生は1967年に帰国、事務所を神田美土代町から麴町四丁目に移設、1972年麴町ロータリークラブに入会することになりました。

1983年に至り、なんとこの山田彝先生が吾がロータリークラブへ会員として入会なさいました。これは氏の再入会であったことを後日伺いました。且つてのこの師弟の関係は、やがて気の合う中年紳士同志の付合に進展、都心の料理屋、酒場のあちこちで仕事から開放された時間帯を、折にふれて楽しむ仲間となりました。1987-88年度に彝さんは会長に推挙され、かのポリオ救済の一大プロジェクトを国際的スケールの大事業に結び付ける功績を果たすに至ったことは、当クラブ会員に止まらず、日本全国のロータリークラブ、ひいてはR. I.傘下の全世界のロータリーアン衆知の事実であります。

この30年前の師弟関係が、やがてロータリークラブでの再会に至った奇遇は、私にとって意味深く、文芸に博識で、国際感覚豊かな上に、鷹揚円満な彝さんの人柄は、今日も私の心の片隅で生き続けております。大の食通で、好人物であった彝先生、今日も極楽浄土で友と酒をくみ交し、際限のない文化談義に花を咲かせていることを想い……………合掌！

## ツネさん、峰先生と私

1973. 1. 18 入会

藤井 吉兵衛

山田さんは、私と同じ大正13年3月生まれ、R.C歴は彼が2年半程先輩、博学多才というか、百科事典の様な男であり、語学も数ヶ国語を使いこなす、正に口八丁、手八丁、万能選手でありました。主に外資系のレミントン・ランド、住友スリー・エム、富士ゼロックス等で活躍され、ビジネス・コンサルティングを主としたお仕事をなさっておられました。

峰先生は私より4才年上の大正9年生まれ、R.Cには、私の次の月に入会された、同期の桜であります。千葉医大、海軍軍医学校・潜水学校を修了され、潜水艦乗組軍医として、最悪の状況下にあった印度洋で活躍。戦死の公報を発令されるも、シンガポールで終戦。捕虜生活3年余、生還され、九段坂病院に勤務、当クラブに入会されました。

私も、父の経営していた国産自動車工業株式会社(特殊自動車車体製造)から、昭和18年中島飛行機武蔵工場へ徴用され、勤労部で統計事務を担当中に、山口市の西部第四部隊へ入隊、幹部候補生に合格後、広島市に送られ戦地に派遣されるべく待機中、沖縄が攻撃を受けた為、急遽北九州に移動、戦闘なくして敗戦。復員するも東玉川の住居の外、全部灰燼と帰し、正に国敗れて山河ありを経験致しました。

山田さんとは、戦時中の事を話し合った記憶はありませんが、いずれも大正末期の生れ、R.C入会年次も同じ様なもの、お互いに仕事と考え方に多少の違いはあっても、大体同じ様な体験をし、悲惨な戦争を潜り抜けて来た思いは共通であり、何は無くとも、まずは一献と杯を重ねる事が多かった事も事実であります。又当時は、ロータリー情報委員会の活動も活発であり、炉辺会合(マントル・ピースは無くとも、酒だけは豊富)が毎月夕刻より午前一時頃迄、喧々諤々論争したものです。その要点は、ロータリーはアイ・サーブであってウイ・サーブではない。ロータリーは寄付団体ではなく、奉仕をする人々の集まりである。23-34の決議について教えこまれ、そのつもりでR.C生活を送っておりました。

87年10月12日開催されました、258地区I.G.F(現在のI.M)に於て、(付記・自72頁～至82頁)申し上げました通り、当クラブの15周年記念事業として山田・峰両会員は、南インドに出張して、現状を調査致しました。

調査研究位ならば一R.Cクラブでも何とかなるにしても、これが撲滅対策となるとR.Iとしても容易な事ではなく、論争の末、目標を1億2千万ドルと定め、募金する事に決し、吾国に対しましては2倍強の40億円が割当られ、日本のR.Cが初まって以来の出来事、第-23-34の決議を如何にするか、次年度以降を拘束する計画を建て良いものか難問続出、世論も別れ、大問題化しそうな時に、I.G.Fで当クラブがポリオについて考え方を発表する事になり、その担当を山田会長が私を指名いたしました。一つの地区のしかも一分区のI.G.Fではありますが、当クラブが最初に調査に着手した事は、熟知の事でありますので、如何なる考えか気になるところでもあります。

私は、R.Cの基本は、ウイ・サーブではなくアイ・サーブが正しいと考えておりましたし、次年度以降の活動計画を拘束する様な、長期計画を建てる事は如何なものか？ この私の考え方を山田会長は良く承知の上での指命であります。

R.Cは頼まれたら如何なる場合も断つてはいけない事は、理解しているつもりですが、いくらなんでも、山田会長と峰先生が二度に亘って渡印され、情熱をかたむけられた計画に、水をかける様な事は出来ませんし、自分の考え方を曲げる事も本意ではありません。再三再四に亘り辞退方を話し合いましたが平行線で、「貴方の考え方を話して欲しいと頼んだのだからそれだけで結構、事の成否は別問題」と譲りません。事の性質上、誰にでも相談できる事では無く、日時は切迫するし、無能の自分には万事窮す。何日も何日も考えました。そしてアイ・サーブ(23-34)と継続事業の件は、一時棚上げする。今日の日本があるのは、敗戦国にも拘らずアメリカが援助してくれたお陰であり23-34の決議が出来た同じ年に発生した関東大震災の時には、アメリカより236億円(米価格換算方式、以下同じ)、イギリス55億円、当時の支那現在の中国20億円強、その他を含め340億円という巨額の救済資金を寄せられ、又全世界のR.CはR.Iを通じ又は直接東京R.Cへ503クラブから89,000ドルを送金せられ、感謝というよりも日本全国民が驚愕したと報じられた様に、全世界の国々から大変援助されて今日があるのだから、ご恩返しというか、幸いお手伝い出来るのでありますから、今迄直接援助して頂いた国ではありませんが、人命に係る事であり、最優先して一刻も早く救済してあげるべきと考えますので、皆様もぜひ御協力下さいとお願い致しました。事前に、どなたにもお話しする時間もなく、山田会長も藤井がどんな話しをするか心配された事と思われませんが、出来不出来はともかく、責任だけははたし、山田会長と無言で握手した事を記憶してい

ます。

I. G. F 終了後、体調を崩され11月末か12月初め頃から休んでおられましたが、半年後の昭和63年7月12日、遂に亡くなられました。

峰先生も長い間療養されましたが、翌年6月9日、山田会長から一年もたたない内に続いて亡くなられました。亡くなられた原因は、はっきり伺っておりませんし、今となっては調べ様もありませんが、お二人は自分の命を縮められてポリオの為に戦死された様な気がしてなりません。貴重な御二人を失った事は誠に残念至極、ご冥福を祈念致すと共に、東京麹町ロータリークラブが、永久に栄える様に温く御見守り下さいさい。

尚、ポリオプラス計画は、予算を大幅に上回り、吾国は40億円に対し、48億9856万8638円、R. I は1億2千万ドルに対し2億2856万ドルと、共にお二人の尊い犠牲が数百万、数千万の人命を救った事は、まちがいのない事実であると考えます。

《付記》 1987年10月12日 中央分区 I. G. F. 発表抜粋

それでは「国際奉仕」につきまして、麹町の藤井さん、よろしく願いいたします。

**藤井(麹町R.C.)** ただいまご紹介を頂戴いたしました、東京麹町ロータリークラブの藤井吉兵衛と申します。

本日は「ポリオプラスについて」ということで御話しを申し上げるように、と承ってまいりました。

手前どもの東京麹町ロータリークラブは今から5年前でございますが、創立15周年記念事業といたしまして、ポリオについて、わずかな予算でございますが、現在の当クラブの会長であり、また全世界のポリオプラスのコーディネーターであります山田会長と峰会員に率先して南インドへお出かけをいただきまして、つぶさに状況を視察してきていただきました。それから立ち上がったわけでございます。その後、当クラブの事業から、258と、お隣の275のいわゆる、東京の両地区の事業として進んでまいりました。それがとうとうR.Iの仕事にまで進展してまいりました。

一クラブ、あるいは一地区では非常に問題が多うございまして、とても荷が重いというふうに考えておりましたけれども、R.Iで取り上げていただくことになりまして、全世界の100万のロータリアンの方々に協力していただけるということになりまして、まことにご同慶の至りというように考えている次第でございます。

すでにご承知の通りでございますが、全世界たくさんの発展途上国の中で、毎年、たくさんの若い命が年間345万人亡くなるという報道がございます。一説には500万という説もありますし、いろいろな説もございますが、山田会長に伺ったところでは、これがいちばん正確で



あろうということでございます。

345万人ということでございます。1時間に349人、1分間に6.6人でございます。本日、I.G.Fが始まりまして、ただいま1時間半経過いたしております。1時間半たちますと、今、この会場におられる方は全部お亡くなりになってしまう……(笑)。決して嘘ではなくて、そういうことでございます。そのくらい大変なことでございます。

わが国の総理大臣が、日本航空の飛行機がハイジャックされましたときに、「人間一人の命は全世界の地球よりも重い」ということを言われまして、刑務所に入っていた犯人を超法規的に釈放いたしまして、わざわざその国まで送りまして、人質と交換をしたということがございました。そのぐらい人命というものは尊いということは、もう申しあげるまでもないことでございますが、とにかく、こうやっている間にどんどん亡くなっていくということは大変なことでございます。

それをR.Iが1億2000万ドル、日本円にいたしまして約200億円のお金を調達いたしまして、この撲滅に協力をしようじゃないか、ということになったわけでございます。わが国に対しましては、全世界のロータリアンが100万人、わが国のロータリアンが10万人でございまするので、その1割でございますが、募金額につきましては諸般の状況にかんがみまして、1割でなくその倍ということで、40億円というのが当面与えられた寄付といいまししょうか、募金の目標の数値でございます。

当クラブといたしましては、昨年度、私は世界社会奉仕委員長を仰せつかりましたが、その関係で、昨年度のポリオの募金のガイドラインといたしましては、会員1人当たり4,000円、5年計画で2万円。当クラブは正確には98人ぐらいだったんですが、100人近いわけでございまするので、割り当てといたしましては200万円ということございました。23-34については後ほど申し上げますが、事態は一刻を争うわけござ

いまするし、またこれを継続事業にするよりも単年度で処理をしたほうがいいだろうということで、各委員会のご協力をいただき200万円をかき集めまして、年度内にご送金申し上げたわけでございます。

本年度は、そもそもロータリアン以外の企業にご寄付を頂戴するという当初の計画でございましたけれども、現在の経済状況その他から見まして、非常に困難であるというようなことから、引き続いてロータリアンがそれに当たるということになりました。当クラブといたしましては、当クラブのメンバーの方々にお話をいたしまして、大体1人当たりいくらかということではなくて、ポール・ハリス・フェローが1,000ドルでございいますが、ただいまの交換レートが150円でございしますので15万円ということでございますが、免税措置もついておりまするので、お願いをいたしまして、何とか目標値は達成できる予定を立てさせていただいております。

この問題につきまして、いろいろと解釈があろうかと思えます。今度のポリオプラスが23-34というものに抵触しておるのかしていないのか、いろんな考え方があろうかと思えます。私どものクラブといたしましては、抵触している・していないはともかくといたしまして、先般、白石ガバナーが公式訪問で当クラブにお見えいただきましたときにお話を賜りましたけれども、大正12年の関東大震災のときに、アメリカのロータリーから八万九千なにがしかのお金をお見舞として送っていただいたわけでございます。当時は東京クラブができたばかりでメンバーの数が44というときに、八万九千なにがしという金額でございします。おそらく、今の貨幣価値にするならば、8億9000万円か89億円かわかりませんが、非常に多額な金額だろうと思えます。びっくりするようなお金を、できたばかりの東京ロータリークラブに送っていただいたわけでございます。

また戦後を考えてみまするならば、焼け野原になってしまったときに、アメリカからいち早くDDTを、発疹チフスの予防ということで送っていただきました。また食べ物がないうちに、アメリカのMSAという、マーシャル元帥が提唱されました援助法で、わが国に小麦粉とか砂糖とか、食糧を送っていただきまして、ようやく今日の日本に立ち上がることができたということでございます。

このご恩に対しまして、今、現実に困っておられるアフリカを初めとする発展途上国の方々のために、われわれは40億円を集めまして、一刻も早くお送りするということが、今の日本のロータリアンに課せられた使命ではないか、というふうに考えておるわけでございます。

23-34というものは、非常に古いわけでございますけれども、今読み返してみましても、非常に立派な哲学を含んだ決議でございます。ちょうどこれができたのも、当時、アメリカで問題になりました、やはりこれもポリオのために23-34という決議に発展をしていったように伺っております。しかし、この決議もできましてからもう64年が経過しておるわけございまして、果たして今の時代に合致しておるかどうか、いろいろとお考えがあらうかと思えます。

昨年行われました規定審議会におきましては取り下げになりまして、可決にはならなかったようでございますが、'89年に開催されます規定審議会において、これと同じかどうかわかりませんが、ロータリーの基本になります、ある意味において憲法のような存在じゃないかと思えますが、当然、これが提案されるというふうに考えております。新しく制定されます89の、幾つになるかわかりませんが、決議に対しまして、われわれは非常に期待をしたいというふうに考えております。

どうか、そういうようなことで、新しくルールのできることをだろろうと思えまするし、また一刻も早く援助の手が届きまして、一人でも早く救

済されることが望ましいのではないかと考えております。

なおもう一つ、今、即効性はない問題でございますが、人口問題がございます。ただいま、地球上に45億の人類がおるわけでございますが、今世紀末にはこれが60億になり、21世紀には100億になるということが言われております。限られた地球上に100億ということでは、大変なことになろうかと思えます。またこの数値も、発展途上国の人口が爆発的に増えておりまして、先進国の人口は減少というような状態でバランスが崩れつつあるように聞いております。

これも一にかかってポリオプラスの影響があるのではないかとこのように考えます。一見、近視眼的に考えるならば、ポリオによって、あるいはそういう疫病によって人口の増加が減少されるように思っておりますが、それは全く逆でございまして、そういうことがあるからこそ、“産めよ、増やせよ”につながってしまうということでございます。ちょうど『イソップ物語』で、マントを脱がすのには、風をピューピュー吹くよりも、太陽の熱が燦々と輝いたほうがマントは取れるということと同じではないか、というように考えます。

どうかひとつ、人口問題は先のことかも知れませんが、当面の問題としてのポリオプラスにつきまして、東京地区のロータリーの方々の絶大なご支援をお願いいたしまして、ちょうど時間となりましたので、これで責任を果たさせていただきます。

どうもありがとうございました。(拍手)

**志村分区幹事** どうもありがとうございました。

それではこれから質疑応答に入るわけでございますけれども、ご質問、ご意見等何でも結構でございますが、どなたかございませんか。

**近藤バスターガバナー** 私は今、ここで発言してはいけないのかもしれませんが、質問が出ませんから、皮切りをさせていただきます。

4名の講師の方々がお話なさったことは、質問ができないぐらい明快であったということではないでしょうか(笑)。

実は私、途中から下へ降りてしまいましたけれども、この舞台上は非常に聞きにくいんです。私は難聴で補聴器を使ってもなかなかはっきりしないんですが、話される方の声によっても、わかり易い方とわかりにくい方とあるんです。実は新宿の樽松さんのお話は、大変おもしろそうだったんですが、全然わからなかったんです。大変申し訳ないんですが……。その他の方は少しはわかりましたが、いちばんわかったのは、今ここ(壇の下)で聞いた麴町の藤井さんのお話でございます。

ポリオプラス、藤井さんのお話はものすごくうまいですね。私はポリオプラスにはちょっとひっかかる場所があるんですけども、藤井さんの話を伺いますと、素直に受け止めて、「いいや、そのくらいのお金は出そう」と。そのかわり、気持よく協力するから、他の人に「出せ、出せ」とあまり時間をかけるな、と言いたいんですね。

そして今、日本全国、ポリオプラスの40億のお金を集めるためにだけロータリークラブの時間が使われてしまって、他のことが何も出来ないで、「おい、お金！ お金！」と言われているように思われる。ガバナーも嘔んでいらっしゃるわけでございまして……(笑)。

そうするとロータリークラブの本質的なものがどこかへ行ってしまって、カネ集めだけになってしまう恐れがある。これではいけないと思うんです。そのもの自体はきわめて重要で大事だと思う。で、私達は、協力できればさせてもらいたい、というような気持は非常にあるのでございまして……、いろいろありがとうございました。

次は山田さんへの質問です。現在、文明国ではポリオはもうなくなってしまったと思うんです。ところが文明国に住む、免疫が全くない人間ができてしまうと、そういう人たちがアフリカへポツと行くとポリオに

なる可能性があるという点についてです。で、何とかという学者がワクチン(生ワクチン)を作って……。

**山田(麴町R.C.会長)** セービンです。

**近藤パストガバナー** ああ、そうそう、セービン博士。われわれは知らないうちにセービンの作ったワクチンで免疫されているので安全なのだが、もし免疫が全部なくなってしまうと危ない。だからワクチンをしておいたほうがいいという話を聞いたんですがね。もしそうなら、「われわれはポリオに対して全く無関係ではなくて、うっかりすると危ない」という感覚が本当ですか。そのへんをちょっと……。

**山田(麴町R.C.会長)** ポリオは、野生のビールスというのが各地にございますものですから、日本は一昨年までの3年間、患者は1人も出ていません。ところが日本も昨年は1人出ています。これはワクチンを飲まなかったために起こっています。これはアメリカでも根絶ではございませんで、アメリカ大陸でもございます。それからヨーロッパでも患者は出ています。日本は接種率が95%でございまして、世界でも非常にいいほうでございますけれども、だいたい80%以上を対象にワクチンを飲ませますと、これは群れのエフェクトという効果がございまして、集団発生は防ぐことができます。しかしながら1人とか2人、それから3人とか4人とか、これはワクチンを飲まない限りは全然ダメです。

現在、文明国といえますか、高度工業国家のほうでは、だいたいワクチンをソークワクチンという注射のほうでやっております。ということは、ポリオの経口のワクチンというのは飲ませることが簡単にできますから、便利なことは便利なわけです。インドだとかインドネシア、それからアフリカなどの場合には、注射のときの消毒が非常に悪くて、煮沸消毒しないで、いわゆるアルコールでただ消毒して、一つの注射針でやりますものですから、実際に注射によってB型肝炎になってしまうとか

エイズになってしまうとか、そういうのが非常に多いわけです。

しかし、経口のセービンのワクチンというのはだいたい300万人に1人ぐらい、ワクチンを飲ませたことによってポリオになるというケースが起こってしまいます。そういう危険はあるんでございますけれども、価格の面とか、経口投与で簡単にできるということで、開発途上国では今のところセービンの経口生ワクチンでせざるをえないというところですよ。それとこうした免疫接種はずーっとしてないと駄目なんですよ。例えばフィリピンのケースでも、これは根絶できるというようなことは、なかなかできることじゃございませんで、R.Iが何年間かやって、そのあと、ちょっとやめたために、また爆発的にパッとでたとか、そういうことがございます。接種というのは常にずーっと免疫接種を続けていかないと駄目なんです。

**近藤パストガバナー** まだわからないところもありますが、この質問はこれでやめます。どうもありがとうございました。

**三野分区代理** 今、近藤先生から口切りの意味でお話をいただいたんでございますけれども、他に何かご質問ございましたら、どうぞ遠慮なく……。

4人の本日のスピーカーのお話、近藤先生もおっしゃったように、たいへん明瞭であったのだらうと思いますが、どうもご質問もないようでございますので……。

**志村分区幹事** それではご質問がございませんようなので、質疑応答はこれまでといたします。

**志村分区幹事** 引き続きましてフォーラムカウンセラー、近藤パストガバナーからお願いいたします。

**近藤パストガバナー** 大変いいお話をしていただきまして、ありがとうございました。

それからポリオプラスについては、さすが藤井さんの地区委員長の貫禄にふさわしい、説得力のあるお話を伺いまして、ほんとにありがとうございました。協力させていただきます。

**志村分区幹事** それでは白石ガバナー、感想をお願いいたします。

**白石ガバナー** 私、感想なんて申し上げる資格は全くございません。一つ、ガバナーとして最後の挨拶ぐらいのところで申し上げさせていただきたいと存じます。

日本ポリオ委員会からポスターがまいっております。で、今日持ってまいっておりますので、あとで阿部幹事さんから各クラブの代表の方に……もうお渡しもうしあげたんですか。どうぞよろしく願いをいたします。

それからポリオのことについて、山田さんから「最近のポリオについて、ひとつ情報をいただけないか」ということでいただいてきておりますので、簡単に申し上げます。

全世界的に非常に盛り上がりまして、アメリカ政府の国際開発機構、そんなのがあるんでしょうか、そこから600万ドル、ポリオに寄付があったそうでございます。それからイギリスでも、これはどういう形なのか知りませんが100万ポンド、といたら相当な金額になりますが、ポリオに寄付されております。カナダはいちばん早く、政府として150万カナダドルの寄付がございました。それからドイツもノルウェーも政府がポリオに寄付をされております。そして1億2000万ドルの目標でございまして、現在、五千何百万ドル達成されております。

それで近藤先生からお話がありましたことは、実はこのあいだ、札幌でロータリー研究会というのがございまして、ガバナーとパストガバナーが400人ばかり集まって勉強会があったんでございまして、その席上やはり「ポリオの件は早くすまして、ロータリーは本来のことに取り組



むべきじゃないか」というご発言があったことは事実でございます。それにつきまして猛烈に反発いたしましたのが、私ども現在のガバナーでございまして、ポリオのことにつきましては、二度と三度と変更がありまして、それで日本は今、1990年から'91年度までの5カ年の企画として、私どもは皆様をお願いして回っております。「それをまた、急に早くしろなんていうことを言われますと、一体、ガバナーの立場はないじゃないか」ということで、猛烈に食いつきました。それで最後に、日本ポリオプラス委員会の渡邊和美委員長が「変更はない。今までのことで、ひとつガバナーはやっていただきたい」ということがございまして、ホッとして帰ってきたわけなんでございます。

近藤先生ご心配の、ポリオだけでは、そちらのほうがお留守になってしまうのではないかというご心配、これはもっともだと思いますが、この地区に関するかぎり、私はその懸念は一切感じておりませんので、先生、どうぞご了承いただきたいと存じます(拍手)。

(以下省略)

## 亡き友のおもかげしのぶ花ふぶき

1973. 2. 24 入会

垣 見 尚二郎

故山田彝さん、峰英二さんの御二人は国際ロータリーのポリオプラス活動の為、南インドに2回に亘りポリオワクチンの供与の為出張され、不幸にも風土病に罹り亡くなりました。

御二方の御冥福をお祈り申し上げます。

山田彝さんとは私が会長になりました時、副会長をして頂き、大変お世話になりました。

峰さんとは1973年2月、一緒に入会されたかたです。

御二人共、若い時からのスポーツマンで、更にお酒も大変好まれた方でした。

山田さんの音頭で「食べ歩きの会」で一緒に楽しく過ごした事が思い出されます。

今丁度、私の家の前の東玉川神社の櫻が満開で、今日は朝からの強風で櫻のはなびらが花ふぶきの様に舞っています。

4月22日

## 会者定離 山田 彝さん追想の記

1974. 2. 25 入会

鈴木 清 二

私の記憶が正しければ、山田さんが生まれたのは1924年で、ご存命ならば70才になるはずである。スポーツ万能で麴町の通りを颯爽とサイクリングをしているのをよく見掛けた。それが忽然と世をさってしまうとは……。

病床でどのような想いをして居られたかと思うと、万感胸に迫ってしまう。死は誰にも訪ずれるものであるが……。

山田さんは日本人離れした云わば平凡な私などに比べれば、一オクターブも二オクターブも違った人である。個性も非常に強く体力にも自信があったが、偶々或る人が彼に腕力沙汰の喧嘩を酒の上で挑んだ時に私が居合わせた、彼の冷静な処理の仕方に感心した事がある。

私は彼を回顧する時、いつも彼の父君「きだ みのる」を思わざるを得ないので「きだ みのる」について私の知っている事を少し書く事をお許し願いたいとおもう。

「きだ みのる」は鹿児島県奄美大島の出身で、後台湾に一時移住し、結婚するころは東京四谷大京町に住む事となる。故郷で古風な武士道的な環境で育った「きだ みのる」に、この亜熱帯の、当時植民地であった台湾の生活が大変な精神的変革をもたらし、異種文化はエキゾチズムに対する嗜好を芽生えさせたと思われる。

其の後、偶然の機会からアテネ・フランセの創始者ジョゼフ・コットと出会い、詩歌を愛した「きだ みのる」はフランス文化に傾倒し、その後、パリのソルボンヌに留学する事となる。その間、恋愛問題から親、親戚から勘当されたり、思想の左翼化から日本大使館から忌避されたり、自由な交友範囲の広さがコスモポリタンの性格を形成し、自分の感情を自由に表現し心の欲するままに行動し、深い愛情がありながら家族に束縛されることを嫌い、それに纏わるわずらわしい問題から逃避し、一所不在の放浪の生活を一生送る事になる。その間、その類希な才能でファーブルの「昆虫記」を全訳刊行し、「気違い部落周遊旅行」により毎日出版文化賞を受賞。その他数々の著作をあらわした。

また「食」に対する興味が非常に強く、思惟や芸術まで食文化から解釈する傾向さえあった。

三好京三及び一時話題になった「きだ みのる」の連子について山田さんと話した事があるが、三好京三の著作で書かれた老境の悲惨なしかも傲慢とまで云われた「きだ みのる」の晩年の生活を語る山田さんの悲しい眼を忘れる事が出来ない。

私がなぜここに「きだ みのる」について書いたかと云うと、山田さんを知っている人々の大方の同感を得られると思うが、私は山田さんの性格のルーツを「きだ みのる」にみるからである。

山田さんはその知力、感性に加え、恐らく理性では判るが云い知れない子供としての寂しさを高め、人に対するやさしさ、そしてそれを社会に対する奉仕まで高揚させた山田さんの偉大さ、実行力に我々は多くを学ばねばならないと思う。

全生活をかけてのポリオプラス活動は、余人の出来難い事である。ポ

リオプラス活動は成功裡に一応初期の目的を終えたかの印象をお持ちの方が多いが、例えばキューバでは未だに小児麻痺が蔓延し、ソビエトの経済的な援助がない現在、秘かにメキシコを通じ国際ロータリークラブにポリオプラス運動を広げる事を、非公式に嘆願し、国際ロータリーもこれに応じワクチンを供与している事実を知っていただきたい。

今、また日本政府が日米新経済協議の柱の一つである「地球的展望に立った協力」分野の対象項目に、ポリオ撲滅に向けたワクチンの提供を提唱した事は、山田さんの先見性を如実に示している。

山田さんの運動が、今世界の小児麻痺の人々に愛と援助を与えつづけている事を、私は東京麹町ロータリーの一員として誇りに思うと共に、山田さんを知らない会員の方々にも、このような奉仕活動を継承、発展させていただくよう心からお願いしたいとおもう。

## ツネさんとミネさん

1975. 5. 10 入会

渡邊貞治

私が麴町ロータリークラブに入会したのは1975年5月で、筒井光康さんが会長の時であるが、間もなく1975年～1976年度に入り、権田さんが会長に就任された。その年度はツネさんもミネさんも理事をなさっており、新入会員であった私も炉辺会合等を通じて親しくおつきあいするようになった。

ツネさんはなかなかの食道楽で、彼の提案で1976年の12月に第1回「食べ歩き会」が行われ、可成の人数が参加したと記憶している。

ツネさんは此の「食べ歩き会」を通じて会員相互の親睦と、ロータリーの理想について話し合う場を設けたかったのである。

ご両親が社会的に著名な方の子供として育った故か、良くも悪くも多分にお坊ちゃんであり、理想を追い求める純粋な人であった。

このことが後年(1982年1月)3H活動の為のインド行きとなり、次いで南インドのポリオプロジェクトにのめり込んで行くことになる。1983年2月にクラブ内でインドのポリオ撲滅の為、ポリオプロジェクト実行委員会が開催され、第1回目の実行委員会が開催されている。

そして第1回の実行委員会が開かれてから丁度1年後の1984年2月に、ツネさんとミネさんが南インドにボランティアとして出発することになる。

当時お二人から聞いた話しであるが、ポリオワクチンを気温の高いインドに送る為には、低温を保った状態での輸送が絶対に必要であり、現地に到着してからの低温保管、更には各地への再配送等々、ワクチンの管理に大変な苦勞があったようである。

ミネさんは千葉医大を卒業したお医者さんで、当時九段坂病院に勤務されて居たと記憶するが、勤務医としての多忙な時間を犠牲にしてのインド行きであった。

ミネさんは非常に好人物で、人からものを頼まれた時には余程のことが無い限り、ニコニコと笑顔で引き受けて下さる人であった。

たまたま私の旧制高校の先輩でもあった関係で、よく銀座方面に繰り出して酒を飲み歩いたが、アルコールが入れば仲間の下手な歌に合わせて、店にあるカスタネットやマラカスを持ち出して打ちならし、その雰囲気は大いにエンジョイする方であった。

ツネさんとミネさんのポリオ撲滅の為の運動が地区の計画となり、更にはロータリー全体の大きなうねりとなって行ったことは皆さんご承知の通りである。

現在の平均寿命からすれば、お二人共早目に相次いでこの世を去って行ってしまわれましたが、人を愛し、ロータリーを愛した人達であり、世界の不幸な人々の為に、正に文字通り献身的な奉仕活動を行ったことに対して深く敬意を表する次第である。

お二人が逝かれて数年経つが、今でも在りし日のあの元気な姿が想い出され、痛惜の念を禁じえない。

以上

## 山田・峰両先輩の思い出

1975. 10. 20 入会

遠矢 洋 二

通称つねさんと気安く呼ばさせて頂いた山田さんとお別れして既に6年の月日が経過している事を聞かされて、唯々時の流れの早さにびっくりしている今日此頃です。偶々約20年前に従兄弟の久木野氏にロータリー入会時に郷里薩摩の先輩山田兄だと紹介された事を良く記憶しております。それ以来ロータリーの何かを機会ある毎に良く教育して下さいました。

又、旧制高等学校の最後の良き時代のバンカラを通じて形成された人間像等についても良く話しをして下さった事等、良き思い出となっております。

一方、峰先輩にもまめに人の為に尽す事がどんなに楽しい事かを教えて下さった数々の思い出があります。現西武百貨店社長の和田君と共に九段坂病院をお訪ねした時の思い出、その後の心暖まるアフターケアの数々、フィジー島に数組みのロータリアンと訪問した時の事。電気釜を持参されたが電気がなくて用を足せなかった事など、数々の思い出が彷彿して参ります。

このお二人が御自分のすべてを投げうって世界のポリオ撲滅の為に尽くされた社会奉仕活動の業績は、我が東京麹町ロータリークラブ発足以



来の快挙であり、クラブ会員の胸に深く刻み込まれているものであります。

お二人の功績を顕彰する組織の中味も、もっと意義のあるものにして、その業績を後輩の為にも力ある限り語り継げる様努力をして参りたいと存じます。

平成6年2月吉日

## 拝啓 山田彝様、峰英二様

1978. 1. 30 入会

中 川 淳

山田さん、彼の地へ慌ただしく旅立たれ、驚天動地。そちらの居心地はいかがですか。極北の地の寒さですか。灼熱の地の酷暑ですか。春風薫りあたりの音は迦陵頻伽のようですか。

当地のごとく人間関係を始め諸々の煩わしさがありますか。

多分、山田さんはこの地で立派な人生を務められましたので、いま頃、環境豊かなる彼の地で愛酒ギリシャブランデーMETAXAを片手に、時間に追われることなく心よりのんびりとお寛ぎと推察いたします。

私は、麴町ロータリーに入会後の人生のたった10年間の短い期間ではありましたが、多岐にわたり特に人間道につきご指導戴き、師としました管鮑の交わりの友とし、いつまでも心の底に焼きついております。

貴方は、博学多才で健康に留意されておりました。

文学、歴史、科学、芸術等々を始め料理技術に至るまで、特に外国語では12ヶ国語をマスターされ、その内タイの王宮の言葉が一番難しかったと云っておられましたね。

また、水泳は固より、休みの日は麴町の自宅より横浜までサイクリングなので鋼鉄のような脚筋肉だと誇示され、食べ物にも非常に関心大でよくあちこちのお店へご一緒させていただきました。いつも「乾杯、乾杯」と杯を一気に空け、ある時、スペアーリーブの骨までバリバリと胃の

中へ収納される健啖家にはあなたの目玉に近いほど一瞬私の目も突出いたしました。

興にのるとゴリラを真似、ご自分の健康表現のごとく両手で胸を叩いておられましたね。

大変失礼ではありますが貴方のことを“トッチャン坊や”と称しておりましたが、それは少年の純な心とより優れた大人の高度な頭脳を兼ね備え、不羈奔放なホモサピエンスでしたね。しかし、豪放磊落な一方非常にナイーブな面があり、ビロードのような木目の細かい気配りをお持ちでした。

とかく当地では、いくら圓が強くなったとは云え、彼の地まで財産、地位を持参できると錯覚されている心貧しい人達のことをいろいろご教授いただき感謝しております。

今にして思えば、ある日自宅にお電話をいただき、錦糸町の墨東病院にお見舞にお伺いした折、しきりに検査の結果、「肝臓癌ではなかったよ」と再三云われるので、また元気な姿にお目にかかれると思っておりました。その後突然、中近東の絨毯をお送りいただき、近々お礼にお伺いしようとした矢先、急に旅に出られました。返す返すも残念です。いまは、形見の品だったのだと大切に使用せず保存しております。

峰さんの思い出は、千代田ローターアクトの青年をわが子の様にかわいがり、活躍され、当クラブの健康管理委員会主催のフォーラムで私が司会をやらせていただいた折、峰さんがパネラーとして最後の締め括りとして「皆んな元気で長生きしましょう」との言葉がいまでも昨日のように胸に残っております。

お二人とも個性豊かな人でロータリーポリオプラスのため不惜身命を

誓ってインドで活動され、名誉の戦死と称されても過言ではないでしょう。

いま頃は彼の地の武陵桃源で美酒を酌み交わし、この地の人々の生き方の議論をされているでしょう。そして彼の地のロータリーでさぞかしご活躍と推察されます。

我々も「散る桜 残る桜も 散る桜」。遅かれ早かれ参りますので、その節は再度ロータリーに入会いたしたく思いますのでご推薦お願い申し上げます。

敬具

山田兄 再謹表示哀悼  
峰 兄

1981. 10. 12 入会

早川 健一

光陰似箭、時間有如流水

御二方が逝去されてから久しくなりますが、今もって私の心の内には鮮やかな映像として残っております。

御二方は、あまりにも純粹であり、俗世に生きる「すべ」を御存知なかったのではないかと思われてなりません。

私は山田兄の御尊父が八王子在に寓居を構えられたころから御交誼にあづかり色々と御教示をいただきました。そして麴町ロータリークラブで山田兄と親しくなる幸せな機会を与えられました。

峰兄とはローターアクトのことで一方ならず御指導いただき、銀座の夜間例会には時折メイクアップの機会を与えられました。そのようないきさつで御二方の思い出は、走馬灯のように浮び面白うて、やがて寂しき独り言を繰り返しております。

書は言を尽さず、言は意を尽さずであります。

去る者は日に以って疎しとは悲しい言葉です。

合掌

## 山田・峰両兄 追悼

1982. 11. 8 入会

園田和朗

私は1982年11月麴町ロータリークラブの一員となった時、両兄には格別お世話になりました。峰君は旧制成城高校の同窓ということもあり、また山田君は持前の親切心から、懇切丁寧に私にロータリアンとしての心得を伝授してくれたものです。

両兄について特筆すべきは、両君が文字通り身を挺して推進した印度ポリオ撲滅運動が、やがて国際ロータリーの一大キャンペーンに拡大されたことで、これは我がロータリークラブが世界に誇れる業績であると信じます。

山田・峰両君 以って瞑すべし

先年、外国人ビジター向けの当クラブ英文パンフレットを作製するに当り、委員一同相談の結果、ポリオプラス・キャンペーンの由来について、次の様な一文が挿入されることとなった。

We take pride in the fact  
that the Polio Vaccination Program for  
Madras in India 1983,  
was initiated by our Club and in effect inspired  
the worldwide Polio Plus Campaign of Rotary International

両君のこの輝かしい業績が、徐々に忘れ去られようとする昨今「山田・峰社会奉仕賞」が設けられたことは、誠に時宜に適した措置であり、ここに両君の御冥福を祈る次第であります。

## 山田ツネさんの思い出

—「足の先から泳ぐ」が取りもつ縁—

1984. 1. 9 入会

黒 沢 亮 平

私が麴町ロータリークラブに入会して間もなく、幹事の大役を仰せつかりました。

事務局の鶴田さんの御指導のもとに分からないながらも、何とかやっている時に、プロのロータリアンの山田ツネさんに出会いました。何事も一言申し上げねば気の済まないという性格の人でした。年は私より12歳上です。

ある時、例会後私に「ちょっと話がある」というので別室で話を伺いましたところ、山田さんはこう云いました。

「黒沢幹事に聞きたい事がある。それはいつも役員会の時に私が意見や提言をしたりしているが、それに対して幹事はこう云っているそうじゃないか『山田さんはウルサイ人だから右の耳から聞いたら左の耳から出し、左の耳から聞いた事は右から出すのだと……』それは本当かね、もしそれが本当だとしたら大変失礼な話ではないか」と、いくらか気色ばんで云うものですから私が「だからといって何か提言した事についてやらなかった事がありますか。もしあったら思い出して下さいよ」といいますと、何か考えていましたがプイット起って行ってしまいました。

それから数日後、懇親会か何かの酒の席で隣同志になりました。山田さんが水泳の自慢話をしていましたから、私が「足の先から泳ぐ競争を



しませんか」というと、何を言うかといった顔で睨みましたが、私が冗談でもない顔をしていましたので、ジッと考えてから「どう泳ぐのだ」と聞くものですから私が説明をいたしますと、ただ黙って聞いておられました。

それから数日後、私に「幹事に水泳競技の入場券を持ってきた」といって何枚かくれたのです。そして私に「自分は今、青少年の水連の手伝いをしているが、一緒に手伝ってくれないか」と言ってくれたことを覚えております。そんな事から打ちとけると、なかなか酒は好きですし、話題は豊富な面白い人でした。

印象に残る話としてはポリオについての話があります。インドの田舎に行くと、病気になるのも何事も運命だからと思って、予防接種も嫌がる人達がいるとのことでした。

それにしてもあれほど元気な山田さんと峰先生がインドから帰ってポックリ逝ってしまうとは、どう考えたらよいのでしょうか。

(まだ足の先から泳ぐ競争もしていないと云うのに)

奉仕や布施は運命や天命に結び付かないのでしょうか。

## ポリオ・プラスで思う事

1986. 12. 15 入会

飯 嶋 庸 夫

ポリオ・プラスの世界における最初の提唱者が我が東京麹町ロータリークラブの故山田彝氏と故峰英二氏で有った事に思いを馳せる時、お二人の偉業の成果は・・・1988年5月19日フィラデルフィア大会でポリオ・プラス募金活動の大成功として実現致しました。

大成功が発表された時、沸き上がったロータリアンの拍手と大歓声は、会場の外でも十分に聞こえる程のものだったそうです。募金総額は目標額1億2千万ドルを80%上回る金額でポリオ・プラスキャンペーンは、ロータリー史上、最大の規模を誇る、大成功を収めた活動であった事は、我々ロータリアンの記憶に新しいところであり、今は亡きお二人もどんなにか喜んで居られた事でしょう。

この募金活動の終幕を飾る式典で、国際ポリオ・プラスキャンペーン委員長(元理事のレスリ・S・ライト氏)は、『私達の募金活動は単に目標を達成する一つ的手段に過ぎず、目標とは全ての子供にポリオの脅威から守るための予防接種を実施する事です。』と語っています。

この精神を、自ら率先して実践された人が故山田氏と故峰氏で有ります。お二人はインドに旅行された時に、如何に多くの子供達がポリオの脅威に冒されているかを目の当たりにし、ポリオからロータリアンとして何とか救う事はできないかと痛感された事でしょう。

故山田氏は、国際ビジネスコンサルタント（富士ゼロックス社の海外事業部長、東南アジア地域支配人の要職を歴任）としての広い視野に立ち、又、故峰氏も医師（東京逋信病院・九段坂病院・熱海温泉病院に勤務、千葉大学医学部講師）として、人道的な立場から、ポリオの脅威から子供達を守らなければとの強い使命感にお二人は燃えてポリオ・プラスの活動を始められた事と思います。

そんな事からお二人は国際ロータリー本部にポリオ・プラスの必要性を熱心に提唱しそれが実現を見、今日の様な大きな活動と成りました。

ポリオ・プラス活動の献身的なボランティアを続けられたお二人の精神は、今もいや将来に亘り、脈々と我が東京麹町ロータリークラブを通じ、全ロータリアンに生き続く事でしょう。

私は、この様な偉大なお二人が居た東京麹町ロータリークラブに席を置く事の誇りと幸せを感じると共に、お二人の築いた尊い足跡に恥じないよう頑張らなければならないとの思いで一杯です。

終りに際し、お二人の御冥福を心からお祈り申し上げます。

ポリオ・プラスの委員を務めさせていただいた事で、ふと思い書かせて頂きました。

以上

## 素晴らしきお二方を偲んで

事務局員

鶴田和子

山田元会長様、ドクター峰先生との「思い出小冊子」発刊にあたりまして、私にもページを分け与え下さいました事に感謝致し、拙いながら一文寄せさせていただきます。

1973年3月知人の紹介で、始めて麹町ロータリークラブの事務局を訪ね、時の森山幹事さんにご挨拶を致しました折、そこに、背を屈め鼻眼鏡をかけて懸命に英文タイプライターを打っておられた、大きな体型の山田様がおいででした。お仕事の手を休め、「ヤアーいらっしやい」と風貌からは不似合いな優しい声をかけてくださいましたが、その時が山田様との初対面でございます。

幸せにも、それから今日まで延々当RCにご厄介になっておりますが、その間、当の山田様は、1978年に幹事・84年には会長をお務めになりました他、海外RCとの児童画交換や図書交換プログラムの実施を始め、地区の世界社会奉仕委員長なども歴任され、そしてポリオプラスプロジェクトでのご活動と、次々にアクティブなご奉仕を重ねられました。私もご一緒にお手伝いをさせて頂きましたが、本当に楽しくそして、実に多くの事柄を学ばせて頂きました。

当時は権田元会長ご命名による「川端会」という食べ歩きの同好会が月例で開かれておりましたが、山田さんは、その幹事役を買って出られ、

ダイエットしなきゃーを再々おっしゃりながら喜んで食通振りを発揮しておられました。

時には、アメ横で食材を仕入れての手料理の話、お得意の英語による自詠詩集発刊(1冊頂戴しましたが)の話、東京高校時代よりのご自慢の水泳の話と、窓外が暗くなっても終わらず、アフター5はグラスを片手に興味深い話題が延々と続くこともしばしばでございました。

あの個性豊かな独特の語り口は、今なお鮮明に懐かしく思い出されず。

そして、病床より数通のお便りも頂戴いたしましたが、明日にも会長職にご復帰頂ける様な文面でした。しばしのご静養とばかり信じておりました、お見舞も叶いませんでしたのが、心残りでなりません。

また、峰先生は九段坂病院のドクターで、クラブでは珍しく2度にわたり親睦活動委員長を務められました他、お仕事柄、常時皆様の健康相談にもまめにアドバイスしておいででした。その上、万年ソングリーダーとSAAでも大活躍され、10年以上も私一人の事務局で過ごしてこれましたのも、力強い峰先生のご援助によるところが大変大きかったからこそといま、思い返しても、感謝の気持ちで一杯でございます。

そして、先生には友人始め私の家族もホームドクターのように親しくお世話になりました。また、常日頃健康に過ごせますのも、色々と養生訓を授けて下さいましたお陰と固く信じております。

突然体調を崩され、お休みの続きました例会は、いつも心細い思いを致しておりました。先生の病室の壁には、ダンディーなスーツが掛けられロータリーバッチが輝いておりました。

お亡くなりになる数週間でしたか「来週でも調子がいいとオータニに

いくからネ」とおっしゃった言葉が、いまも耳に残っております。

本当に、素晴らしいお二方は、揃ってお優しく、お酒が大好きで、人を、そしてロータリーをこよなく愛しておいででした。

一年足らずの間に、続いて天国に旅立たれましたが、どうぞ安らかに  
お眠り下さい。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 思い出の中から

エレクトーン奏者

志村千陽

今ペンを取り思い起こしてみますと、山田様、峰先生には本当にお世話になり、改めて感謝の気持で一杯です。沢山の楽しい思い出の中から、少し綴らせて戴きます。

山田様は以前、私の実家のすぐ近くにお住まいで、道でよくお会いしたものです。美しい奥様と並んで歩いていらしたあのヒップの高い日本人離れしたスタイルが、上智大脇の坂道と共に思い出されます。

食通でいらした事は有名ですが、ある時上野でバッタリお会いしました。丁度お肉を買いにいらっしゃる所で私共も案内して頂き、おいしいお店を教えて頂いた事もありました。

一番印象に残っておりますのは、狸穴のアメリカン・クラブで催された外国人のピアノの演奏会にお誘い頂いた時の事で、吉川様も御一緒でした。その時のアーティストもプログラムも残念乍ら忘れてしまいましたが、ピアニストが直接聴衆に語りかける暖かい雰囲気コンサートの時、山田様が英語を逐一訳して下さい、私も皆と一緒に笑ったり出来たのでした。

後年、峰先生も山田様と御一緒にインドへ奉仕に行かれた後「Teddy（山田様の通称）はインドの方言まで話してしまうし、全く彼の語学力は天才的だ」と仰有っていらっしゃいました。

“Bei mir bist Du schön”

この歌を聴く度に峰先生を思い出します。十八番にしていらしたこの曲だけでなく、ハワイアン・ソングにも造詣が深く、何曲も原語で歌われるので、私共は「先生、どうしてそんなに歌詞を覚えていらっしゃるの？」と尋ねたものでした。

銀座にお誘い頂いた時は、よく「お父ちゃんを呼べ」（亭主の事）と仰有って下さり、夫婦共々本当に楽しくアルコール漬けになりました。腰を屈めてマラカスを振っていらっしゃるお姿、今も目に浮びます。

又、動物がお好きで「北海道の畑正憲さんの所に行き度いんだ」と常々話していらっしゃいました。宴会のお帰りに我が家の猫三匹に会いに来て下さる事も度々、正にムツゴロウさんにそっくりの仕種で床に座り込んで猫と遊んで下さいました。三匹共、同じ模様なのに先生はちゃんと識別して下さい、年賀状に猫の名前まで書いて下さる程でした。そのままピアノとエレクトーンに挟れた“気を付け”の姿勢でしか寝られないスペースに泊まって下さり、朝になると“みの字より”と書き置きを残して、私共が眠っている間にそっとお帰りになりました。（きっとこの書き置きをもらった人は沢山いるのでは…… なーんて余計な詮索はやメにして）

旅行にいらした時には必ずお土産を買って来て下さった事や、風邪をひいたと言っては九段坂病院の泌尿器科を訪れたり、思い出は尽きませんが、おみ足が御不自由になられた折、例会の帰りに近くの駅まで私のヘボ運転でお送り出来た事は大きな喜びでした。

お別れの日が近付き、涙をこらえて病室に伺った時、「やりたい事は、全部やりました！」の一言。忘れられません。



最後に山田様、峰先生と御一緒させて頂いた思い出として、夜中まで六本木にいた事がありました。鈴木様も御一緒に、とても楽しく話に花が咲き、時の経つのも忘れてしまい深夜帰宅した所、その日に限り結婚前の主人から何度も電話があり、母に猛烈に叱られましたが、今となりましたはとても懐かしい思い出です。

---

1994年6月20日 発行

---

**東京麹町ロータリークラブ**

〒102

東京都千代田区平河町 1-3-8

平河町プラザ 501号

電話 (03)3263-9220

---

## 思い出草

---

2016年4月1日発行

東京麹町ロータリークラブ

〒102-0093

東京都千代田区平河町 1-3-8 平河町プラザ 204号

TEL 03-3263-9220

FAX 03-3263-9122

E-mail : office@koujimachi-rc.jp

URL : <http://www.koujimachi-rc.jp/>

---

\*1994年6月20日に発行された書籍の復刻版です。